

K O Σ M O Σ

Vol. 8, No. 2 (No.23) 1973. 10. 30

読書の季節

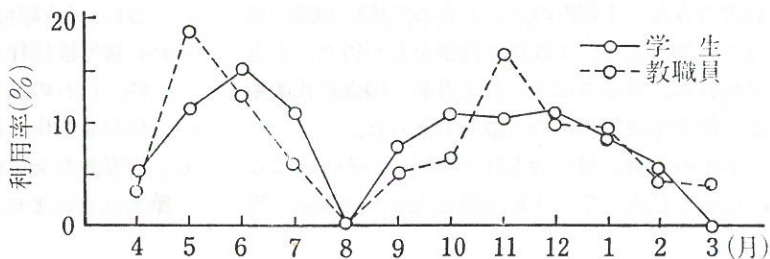
都 淳 一

「読書の秋」という言葉がある。なるほど、秋の夜長は暑からず、寒からずで、読書には好ましい条件が整っている。しかしこの言葉は秋だけが読書の季節であるかのような感触を与えるので、私はその言葉をあまり好きでない。おそらく読書人なら大なり、小なりそう感じるであろう。そのようなことから、私は当工学部分館の月別の利用状況を調べてみたが、その結果は図に示すとおりであった。休暇の時期にあたる8月と3月に利用件数の少いのはやむをえないとして、秋のほか晩春にも読書の季節がある。この時期には夜は短い。しかし夜の時間の長さとは無関係に、暑からず、寒からずという気候が読書の季節を決定づけるようである。

読書の季節を考えるとき、私はだいぶ以前ミシガン州立大学に留学していたころのことを思い出す。当時私は寄宿舍に住んでいた。ある雪の深い冬のことである。この大学ではクリスマス前の12月22日から1月1日までが冬の休暇にあたる。休暇中は寄宿舍を閉鎖するので、外国人学生はこの期間大学構内のクオンセット（かまぼこ兵舎）村へ移される。そこでは多くの学生は毎日コミック本に読みふけていたが、この期間でも大学図書館が開館していたのが私にとっては救いであった。私は零下の外気を衝いて図書館に日参した。ふだん講義などのためにじゅうぶん図書館を利用できなかった私であったが、このときばかりはがらんとした館内で開館から閉館までの時間を過ごした。そしてこのとき読んだ何冊かの書物の内容が数年のちに私の学位論文に大きなヒントを与えてくれた。私にとってはまさに「読書の冬」であったのだ。

(図書館工学部分館長)

私大図書館 総大会を終えて	2
自動複写機について	2
投書箱から	6
古書展に思う	8
日誌	8



私立大学図書館協会第34回 総大会・研究会を終えて

本年7月26日から28日の3日間にわたり、図書館に於て私立大学図書館協会総大会・研究会が開催された。この総大会・研究会は協会会則に規定され、年1回、5月頃とされている。会場は加盟校が概ね順次当番校として提供し、協会の常任理事校と協力して大会・研究会を開催する。大会は私立大学図書の管理、運営に関して必要事項を研究討議し、若しくは、審議・議決して私立大学図書館の発展を計ることを目的として開かれる。本学図書館でも今まで他大学に依存して来たが、新図書館の完成を機に、大学当局および関係部門の理解と協力のもとに126大学、278名の参加を得て盛会の裡に本大会・研究会をつつがなく終了して協会、加盟校への大役を果し得たことは館員の一人として喜びに堪えない。既に本学でも昭和30年3月本協会の関東部会を旧図書館閲覧室に於て開催したこともあるが、総大会を開催したことはかつてなかった。この大会は第1回が昭和13年に慶応大学に於て開催され、戦中一時中断されていたが昭和21年再び開催され、昨年は近畿大学に於て開かれ本学図書館からも数名の館員が参加した。

さて、本年度の私立大学図書館協会総大会・研究会も慣例に従い運営された。先づ第1日、開会式、総会、講演、懇談会、第2日、研究会、大会、閉会式、第3日、見学研修という行事日程で行われた。第1日の「情報化時代における生活と社会」磯村前学長の講演は巧みな話術によって展開され有意義であった。第2日「図書資料の国際交換について」と「真宗聖教目録史」についての研究発表と「大学図書館業務の機械化について」と題するシンポジウムが行われ、図書館資料に関する問題、図書館業務の改善についての1つの方法が発表され、うるどころ大なるものがあった。その他第3日の見学研修も特に地方からの参会者のみならず都内の方をも含めて広い知識の修得の一助、あるいは確認の役割をもち得たことと思われる。見学先は国立公文書館、国立近代美術館、都立中央図書館の三機関であった。

本年の大会、研究会も既に34回をかぞえ、ここに集まる私立大学図書館も総合大学、文科系、理

科系単科大学もあり、各大学それぞれ独自の問題や共通の問題も極めて多い。又集まる方々も館長事務長、館員ありである。これらの方々がこの年1回の機会を利用し、相互の知識と経験の交換の場としても大きな役割をもっているといえる。

大会は無事終了したが、この会議の成果は会議の運営だけでなく、討議されたことがどの程度生かされるかは、それをふまえての図書館長、館員の努力が大切であることは言うまでもない。これを生かし実行して行くためには人と予算とに関わるものが大であろう。図書館の発展のため関係者の一層の努力を願うものである。

(整理課長 高橋誉文)

自動複写機利用について

図書館では、閲覧利用者に対するサービスの一環として複写を行ってまいりましたが、利用者の増大にともない、11月よりセルフサービスによる自動複写機(U B I X 800)を設置いたしますので当分の間、下記の要領で利用して下さい。

設置場所 2階カウンター前

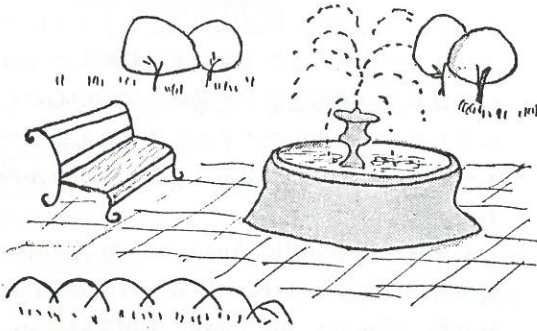
利用時間 開館日の午前9時30分～午後9時
(但し土曜日は7時30分までとし、
大学または当館が必要により利用時間を変更することがある)

サイズ B4以内に限る

料金 B41枚につき20円(10円硬貨以外は
使用できません)

- 1 複写機の利用資格者は、本学教職員、学生、または特に館長の許可を受けた者に限る。
- 2 複写は当館所蔵の図書資料に限る。
- 3 複写枚数は1回につき20枚までとし、21枚以上の複写はカウンター⑤に申し込んで下さい。
- 4 当館では両替は行いません。従って10円硬貨はあらかじめ用意して下さい。
- 5 複写機使用上の注意
 - イ 所定のスイッチ以外は手を触れないで下さい。(故障の原因になります)
 - ロ 複写機操作中にランプの点滅、インクの濃淡、汚れの発見等、異常を感じた時は直ちに係員まで申し出て下さい。
- 6 複写した文献に関し、著作権上の責任は図書館では負いません。(閲覧係)

ふらぎでりぶろ



山本啓量著

原始仏教の哲学

山喜房仏書林刊(発注中)

本書は漢訳では通常「仮」「施設」と訳される paññatti を「知らしめる」と訳し、原始仏教を知らしめるの哲学として、哲学的思索のもとに体系づけようとしたものである。

たしかに仏教はいうまでもなく宗教であり、したがってその持つ思想体系も、個々の教説も、ひいては一言片句たりとも迷える人間を知らしめん (paññatti は paññā—般若の智慧—と語源を共にする言葉でさとりにつながる) としないものはないといってよい。しかも仏教を単なる思想と見るのではなく、自らも知り、他をも知らしめるという実践的なところに注目したことは大いに意義のあるところであろう。また著者が単なる文献研究ではなく、自己の哲学的思索をもって論を進めている姿勢は尊い(といって過去の文献研究の成果をふまえ、経文を正確に把握することは必要欠くべからざることであろうが、この点に問題なしとはしない)。

本書は上記のような意図と姿勢のもとに、次のような五つの章を立てて論述する。即ち「第一章 原始仏教の知らしめるの哲学」「第二章 存在論上における知らしめるの哲学」「第三章 認識論上の知らしめるの哲学」「第四章 如実知見と知らしめるの哲学」「第五章 知らしめるの哲学の根本的考察」である。しかしながらこのような見事な組織立てにしては、必ずしもその体系化に成功しているとはいえないし、もう一つ説得力に乏しい。全体を通してみても「知らしめるの哲学」と

はどういうことなのかという肝心なところが明確ではない。広範な種々の教説をこと細かに考察しているが、それにしては四諦・無常・苦・無我説といった原始仏教を代表する重要な教説にはそれほど筆を費しているわけではないので一本筋が通っていないという印象を受ける。あるいはもともと paññatti という概念が、仏教そのものではなく、むしろその上に立つ方法論・実践論とでもいうべきものであり、したがって原始仏教の哲学をこれでもって裁断しようとする事自体に無理があるのかも知れない。また著者自らあとがきに「本書の特徴の一つは触の正観によって一貫せしめられ……」と言うほどには、触 (phassa) そのものの考察にもしっかりとした論証がなく、いかにも唐突に触が強調されている。

細かく論じればその他いくつかの問題点もあるが、冒頭に述べたような意図と姿勢とは貴重であるし、四禪、四無色定などの哲学的考察は傾聴に値する。

原始仏教思想に関する久しぶりの研究書であるので取り上げてみた。

(文学部仏教学科助手 森章司)

敬語講座

明治書院刊(整理中)

我々が社会生活を営むとき、言語生活を抜き去ることは決してできるものではない。この言語生活を営む上において、敬語の占める位置は極めて高いといわねばなるまい。しかし、案外、等閑視されているのもこの敬語であろう。そのような意味からも、敬語についての書物を、この秋の夜長にひもといてみるのもよいと思う。

幸に、このたび『敬語講座』全十巻(明治書院)が編集され、配本されつつあるので、これについて少しく紹介する。

まず、本講座に対する基本的な考え方は、刊行のことばによると、

1. 敬語は、単にことばだけの問題ではなく、対人行動の全般に関する問題である。
2. 尊敬・謙譲・丁寧の三種に限らず、厚遇・冷遇の関係、親疎の関係、敵味方の関係その

他各種の人間関係から発する待遇の表現を広く含むものである。

3. 敬語は、言語の基本構造を支配し、その言語の全体系を律する大きなシステムである。
4. 日本語だけの特殊現象ではなく、世界の言語のすべてに見られる現象である。
5. 一つの形式が永久不変の軌範性をもつものではないから、次の時代の敬語のあるべき姿を、一方的に識者が教えるものではなく、各人がことがらの根本を理解して、自分で考えるべきものである。

とし、「敬語早わかりの虎の巻としてではなく、敬語を根本から考え、問題点を正しく理解するための抛り所を読者に提供するため」の論集とするよう企画・編集されたものであるという。

したがって、講座の内容は、敬語の体系を記述し、各時代における文学作品の敬語の実態を追求して、その推移を解明し、現代敬語の実態と展望、さらに、世界の敬語、敬語用法辞典、敬語の研究手法等に及んでいる。すなわち、各方面から敬語を取上げて、個別的に或いは総合的に検討し、巻末に「風俗と敬語」を企画するなど、ユニークな編集を示し、読者に十分考えさせるよう配慮されている。

第一回配本は、巻二、『上代・中古の敬語』で、時代の概観、記紀・万葉、源氏物語・枕草子、栄花物語・大鏡、漢文体文章、風俗等を取扱い、第二回は、巻六『現代の敬語』で、現代敬語の概観、社会生活と敬語（地域社会・階層・家庭・職場等の敬語）、現代敬語の問題点と敬語の将来（座談会）等が編集されており、極めて有意義なものである。（短期大学日本文学科助教授 宮田裕行）

システムエコロジー

昭和45年から47年までバンコクにある国際機関 AIT（アジア工科大学院）で応用統計学・プログラミングシステムなどを教えていたので開発工学関係4万冊をほこるAIT図書館を随分利用させてもらった。システム工学科所属だったので統計学関係のものを読みあさったが、ここには環境工学科がありエコロジー関係の本も沢山あった。

各国の大学卒業生を受入れて修士教育と博士教育を施す大学院だが公用語は英語ということになっており、アメリカイギリスなどの動向しか分らないが日本での植物生態学や動物生態学中心のものに対して、どうやらシステム生態学とも云うべきものを中心にしつつあるらしいことがうかがわれた。

45年秋に Scientific American の Biosphere 特集号が出て後に Freeman 社から出版され、同様な形で Energy and Power も出ているが、これらに見られるように地球を1つのクローズドシステムに見立ててこの中で炭素酸素など着目するものについてグローバルに追って行くやり方は今後計画に関係する者にとって大いに参考になろう。日本ではまだまとまったものはないが、次のものはこの方向をめざしているものとして注目される。

- (1) 宝月・吉良・岩城編 環境の科学（NHK市民大学叢書）日本放送協会 昭和47年（発注中）
- (2) 竹内均・島津康男 現代地球科学（筑摩総合大学）筑摩書房 昭和44年（450:TH）
- (3) 信州大教養部 自然保護を考える 共立出版 昭和48年（発注中）
- (4) 島津康男 地球を設計する 科学情報社 昭和45年（発注中）

(1)の副題は「自然・生物・人類のシステムをさぐる」(2)の副題は「自然のシステム工学」で、生物学側からのアプローチと地球物理学側からの見方の差はあってもかけがえのない地球をみつめ直す視点は同一である。(3)は信州大教養部の自然保護講座の成果で学際的な分野に対する一つの行き方を示している。(4)は副題に社会地球科学の提唱とつけられてあり(1)、(2)などに著者が扱った素材をシミュレーション的に扱っている。

いづれも地球を1つのクローズドシステムに見立てて身近な現象だけをとりえ公害公害とさわぐだけでは駄目であることを力強く説いた好著で広く一般にすすめたい。（工学部教授 中村慶一）

参考図書の解題

一社会科学全般に関するもの一(2)

① Encyclopaedia of the social sciences. 15v.

○Seligman, Edwin R A

○The Macmillan Company

○1963年

社会科学の全分野を包含する最初の完全な事典で、政治学、経済学、法律学、文化人類学、社会学、刑罰学、社会事業における重要問題及び倫理学、教育学、哲学、心理学、生物学、地理学、医学、芸術等の社会的状況を網羅することに主眼点がおかれている。

規模と取扱いは国際的で、10の研究団体の援助のもとに計画・準備されたものである。

しかし英語圏や西欧については、その他の地域よりくわしく書かれている面もある。

記事の約50%は伝記体であり、故人の伝記が多く含まれている。

又、主要な部分の文献についても十分配慮されている。(請求番号 303:E)

② Social science abstracts. 5v.

○F. Stuart Chapin 編

○Social Science Abstracts, Inc.

○1930年

社会科学における全世界の逐次刊行物文献の完全な抄録及び索引誌である。

1巻から4巻が抄録で、1929—1932年にわたって刊行され、第5巻が索引で、そのうち主題索引が1—548p、著作索引が551—677p、社会科学の逐次刊行物のリストが681—725pといった構成である。

諸専門家によって、抄録とともに広範囲な文献が記されている。

実際には収録範囲が「Encyclopaedia of the social sciences」と同じ分野である点が特長となっている。(請求番号 303:S)

レーザーハンドブック

—工 学 部—

レーザーとは、“Light Amplification by Stimulated Emission of Radiation”の頭文字をと

ってつくられた言葉であり、極超短波、可視光線の増幅、発振装置のことである。それは物理学の分野ではごく新しいものであり、1960年に彗星のごとく出現し今では、科学の一分野における基礎研究の対象としてだけではなく、自然科学のすべての分野に関連をもつ科学技術に発展してきている。光学、電子工学、物性物理学、情報科学はもちろんのこと、核融合や生物物理学をはじめ、地球科学、天文学、医学などの分野にもレーザーの応用が広がっている。

レーザー自体の研究は急速に発達し、レーザー光制御技術やレーザー応用もまた著しく発展した。このような事からレーザーを取り扱うのに必要な基礎知識、レーザー応用の新しい方法、レーザー技術の実用的な最新のデータを多数の文献の中から探し出すのは容易ではない。このレーザーハンドブックは、学生、技術者、研究者がそれぞれの立場で必要となる量子エレクトロニクスの基礎知識から最先端の応用技術までを盛り込み、十分役に立つような解説書として書かれている。執筆者は、霜田光一博士を始めとして50名の学者が共著している。内容としては、

1. メーザー・レーザーの歴史
2. レーザーの基礎
3. レーザー材料
4. レーザー装置
5. レーザーの測定技術
6. 光ポンピングとマイクロ波メーザー
7. 非線形光学
8. レーザーの分学的应用
9. 光波エレクトロニクス
10. 光計測と光情報処理
11. 光通信と光伝達、伝搬
12. 光エネルギー利用
13. レーザー障害と医学的応用

という章に分れていて、各分野で専門の学者が書いている。今までレーザー関係の図書が少なかったので、この分野の研究をする人には役に立つ参考図書だと思う。

A 5 版, 795頁, 800円

朝倉書店, 請求記号548.44 I F

投 書 箱 か ら

『今日の様に、一見外は雨ふりですずしそうな天候ですが、やはり区切られた図書館の中では（特に小閲覧室においては）なかなか蒸し暑いものです。せめて、午後7時までは、換気だけでもお願いします。私の様に下宿している学生にとっては、やはり図書館は必要であり、それ故に、一見ぜいたくと思われる要求もしなければならないのです。

また全体に、照明が暗すぎます。（特に第2閲覧室）他についてこの図書館への不平は全くありません。実に設備の整った、日本でも有数の図書館であると、東洋大学の学生として自負しておりますが、その管理に少し不備な点があるかと思われる。

もう1つ、傘入れをコインロッカーにしたらと考えます。確かに、この件については、我々使用者学生に全責任があることは認めます。しかし、このままの状態ですと、我々は図書館の中で、水のしたたる傘を持ち歩かなくてはなりません。これでは私達も困りますし、また図書館のジュウタンがいたみもします。早急に対策をたてていただきたいと考えます。』

（7月13日開箱のうちの1通）

（係から）6月から9月末までの間に、15通にのぼる投書を受けました。

今回は、この各投書における主張を代表ないし集約すると思われる、上記の投書を全文掲載させてもらい、これに回答するかたちで、私どもの考えを述べてみたいと思います。

投書者の苦情の第1点、閲覧室の「換気」について。

今夏の冷房期間は、機器の試運転期間を含めて、6月27日から9月14日まで、冷房時間は、休暇に入るまでが午前9時から午後5時まで、休暇中が午前10時から午後6時まででした。開館時間中、冷房がされておれば、投書者のような苦情は出ないわけですが、現実には上記のとおりで、せっかく冷房設備をもっているにもかかわらず……といった苦情が多くの利用者から出たことは確かです、申し訳なく思っています。

私どもも事前に担当課と話し合っ、どうにか開館時間中の冷房をと要望したのですが、保守要員の確保が人手不足などの理由で難しく、上記の条件での冷房を止むなく了承するかたちとなった次第です。それでも今年の夏よりはだいぶよくなっています。今後も、とくに夜間の利用状況などのデータをもって、担当課との話し合いをつづけ、望ましい方向にもってゆきたいと考えています。

なお、この冷房が不可能なら「換気」だけでものご要望ですが、これまた現時点では早急な解決は不可能です。書庫部分だけしか、冷暖房機器と同一系統で、より強力な換気が可能な設計になっていないからです。したがって書庫以外の部屋の換気は天井で作動している換気口だけということになり、あらゆる気象状況や利用状況の変化に対応して、適当な環境を維持するという能力は、設計当初からないわけです。私どもも開館後間もなくこの換気の悪さには気づいて、その解決のための検討をしたのですが、この建物の基本的な面にまで影響する問題であることが解り、のちに述べるような、この図書館の全体的検討の一環として取り上げ、解決の糸口を見出す以外はないのではないかと考えています。ご了解下さい。

第2の点、第2閲覧室の照明について。

ご指摘のとおりで、いま検討をすすめています。この部屋は他の閲覧室と違い、設計時点からあえて、個室的な性格をもたせたものです。他の部屋に比べて照明が暗いのも、長時間じつくりと諸資料に取組んでもらうような場合に利用してもらうことを想定したものです。事実この部屋が、私どもの期待どおり、もっとも利用率の高い閲覧室になっています。それだけに照明が暗いという苦情は投書者一人ではなかったのかもしれない。

また照明の暗さからかどうかわかりませんが、思わぬ不祥事を招いています。盗難事故の発生がもっとも多いのです。私どもはこの事故防止という観点からも照明の問題を検討せざるをえないところに来ているわけです。

第3の点、「傘入れ」について。

他大学の図書館の様子なども調査しながら、いろいろと研究するなかで、傘箱のコイン・ロッカ

一化も検討いたしました。本件については、私どももお手上げの状態でご苦慮していることを、すでに第22号の本欄で利用者の皆さんに訴えました。

第22号の本欄で予告していた方式を、夏期休暇明けから採用して現在にいたっています。これは雨の日のぬれた傘を、玄関入口に用意したビニール袋に入れて、館内はもちろん閲覧席まで持ち込んで自主管理してもらおうというもので、利用者にとっては傘箱収納方式よりよほどわずらわしさが増したと思いますが、傘箱が先般のべたような使用不能な状態、その後の相つぐ盗難事故を考え合せますと、止むを得ない措置でした。私どもも、これによって仕事が大分増えました。使用後の傘袋の整理にしても、1人の職員が半日もかかる有様です。人手不足で、図書館本来の業務も満足に出来ない折に、このようなサイド・ワークに貴重な労力をさかなければならないのは、私どもとしても残念でなりません。今年度一杯の実験的措置ですが、この間によりよい方法が見出せない場合には、この方式を定着させて、みなさんにも協力してもらおう以外にないと考えています。したがってコイン・ロッカー方式は、費用の点と設置後の管理に問題があり、採用をあきらめました。

投書者の苦情の点については、一応以上のようにお答しておきます。さて、第2の苦情の後段に「実に設備の整った、……その管理に少し不備な点があるかと思われます」とありますが、この点にたちかえって、少し考えてみたいと思います。

近年つぎつぎと各大学に、各地域に新しい図書館が建設されてきていますが、そのなかにあっても、当館が多くの特長をもっていることは間違いありません。相つぐ見学者の来館、今夏の私立大学図書館協会の総大会・研究会が本学で開催されたことなどもその証左だと信じています。私どももこのような立派な図書館で働けることを光榮に思うと同時に、大学図書館の目的に向けて、この立派な施設設備を如何に活用していくか、日々努力しているわけです。如何に立派な施設設備をもった図書館でも、これを運営するのは人間であり、この人間すなわち図書館利用者と図書館業務に携わる者とが、これを宝にするか、宝のもちぐされにするかを決定すると思います。そ

してプロ野球の金田監督的な表現をすれば、最終的には利用者こそが図書館を管理運営する主役でなければならないと考えます。

傘箱の問題から、今度はコイン・ロッカーの問題です。コイン・ロッカーが、誰れかによって、ある種の器具でこじあけられ、中に入れてあった荷物の中から現金が抜きとられるという事故が、春の新学期以来頻発したことです。6月の時点で、利用者の皆さんにも、現金など貴重品は収容しないよう呼びかける一方、私どもも出来るだけ注意を払う努力をしたにもかかわらず、去る10月3日一度に3件も上記の事故が発生し、止むなく急拠、カウンターから監視できる位置にロッカー室を移したわけです。ある利用者は、コイン・ロッカーがチャチからだ……。ある人はチェッカーを置けばよいではないか……と。

大多数の利用者と私どものよりよい図書館への希いと努力をよそに、予期せぬところから、この図書館の理想が一つ一つ破壊されてきているように思えてなりません。

「その管理に少し不備な点が……」投書者は遠慮がちに書いていますけれども、私どもは少しではなく、多くとの認識をもっています。それも上記のような低次元の問題に振り回されるなかからこの図書館がオープンして満2年になります。私どもはこの2年の経験をふまえて、長所と短所を調査分析し、欠点を是正する方策を見出す具体的な努力をはじめようと話合っています。

利用者の皆さんのご協力を期待しています。

この度、本学教員（匿名）より10万円の御寄附をいただきました。厚く御礼申し上げます。図書館では御芳志に従い、図書選択委員会の議をへて下記の図書を購入いたしました。学術研究の資料として広く利用したく存じます。

記

グランド現代百科事典 21巻 学習研究社
世界地名大事典 8巻 朝倉書店

昭和48年10月25日

東洋大学図書館長 大島建彦

古書展に思う

芸術・ファッション・食欲・読書・その他いろいろの呼び名がある如く、秋の印象は深い。古書祭りなども秋ならではのムードをかもし出すものです。学生時代にはよく神田へ古書をあさりに出かけたものです。

さて今度、国際古書籍商連盟の第22回世界大会が、初めて東京で開催され、その行事の一環としての第5回国際古書即売展（9月28～30日）は、いっそう私の心を打つものがありました。これは私ばかりでなく、図書館勤務の諸先輩方々も同様の気持であったにちがいません。英・仏・米・独・伊・日本等々、国際色豊かな開催場所は、九段下のグランド・パレスでしたが、国際的と言うばかりでなく、それ以上に古書のもつ歴史的価値と、その生命力の逞しさにある種の感動を覚えたからです。それぞれの国の歴史的認識は、これら古書が紐とく担手になったし、今後さらに価値あるものになるにちがいないのだから……。

展示物は歌川国政一幅の485万円を初めとしてカール・マルクス、ショパン、メンデルスゾーン等の有名人、音楽家の自筆、樋口一葉、正岡子規自筆歌稿幅、その他種々の専門書等、洋書、和書をとわずどれも目に余るものがあった。しかし、一般人にとってはとても手に入れ難い、想像を絶するような高価さである。そこで期待したいのは、公、私、図書館、大学図書館が積極的に伝統をもつ価値ある書籍を保存できる体制の一環として積極的に働いてもらいたいです。

気障であるようですが、私は今だに思うことがあります。「ものいわぬ農民（岩波新書）」という表題の本があります。「ものいわぬ本」をこよなく愛しているのです。それは密かに本棚に眠りつけてはいるが、対処すればするなりに、それに対する賛同と批判は私の精神的糧になり得る最良の友の一つであるからです。

最後に、一般人の手のとどかない或は、古書マニアの祭り騒ぎとして軽視する人もいるでしょうが、この世界的視野に立つ国際古書展の、今後いっその進展を望みたい気持であることを付加し

ておこう。（森）

日誌（6月～10月）

- 6月16日 私大図書館協会「東地区部会」（於慶応大学研究教育情報センター、高橋課長出席）
- 23日 故湯本武比古氏（井上門了先生の友人）蔵書283点、1,058冊、遺族の方より寄贈を受ける。
- 6月25日 「東洋大学図書館所蔵目録」和文篇第2分冊、刊行決定
- 7月21日 私大図書館協会「書誌学分科会」
- 25日 " 役員会（於慶応大学研究教育情報センター、館長外1名出席）
- 26日～28日 私大図書館協会、第34回総大会・研究会（全国の加盟私立大学図書館126校278名が参加のため来館）
- 8月30日 第2回肉筆名品展示即売会（於東横東急）で、井上門了先生筆「七絶句幅」購入
- 9月18日 創価大学図書館、職員の方2名見学のため来館
- 21日 私大図書館協会「閲覧奉仕分科会」
- 22日 私大図書館協会「書誌学分科会」
- 28日 私大図書館協会「書誌作成分科会」国際古書即売会（於ホテル・グランドパレス）ウェブスター「英語辞典」初版全2巻1828年ニューヨーク刊購入
- 10月2日 新理事会へ図書館業務の概要を報告（館長以下3名出席）
- 9日 ロッカーの事故防止のため、緊急暫定措置として、目録室とロッカー新聞閲覧コーナーを相互移動。
- 12日 見計図書の選択（於東版、選択委員・図書館職員出席）
- 17日～19日 昭和48年度全国図書館大会（於高知市、都分館長外4名出席）
- 23日 図書選択委員会
- 24日 父兄会神奈川支部より25名の父兄見学のため来館